Merry-London life

会場の壁の上をうねりながら流れていく数々のMerryワード。写真も文字もすべてプロジェクター（エプソン販売／ELP-5350、ELP7000）から映し出されている。使用したプロジェクターは全部で10台。プロジェクター1台ごとにiMac、Power Macなどのコンピュータを繋ぎ、その動きがコントロールされた。

会場内に設置されたベンチに携帯電話が設置されており、そこから、Merryワードを打ち込むことができる。

ラフォーレミュージアムの入り口には、看板掲載、壁やそこに貼られたポスター、女の子たちの写真が展示された。

ロビーの1階に、セルフリッジで開催された「TOKYO LIFE」では、海のウェブサイトにも対応するエリアを設置され、日本から送られたMerryワードを眺められた。また、最後はMerryが凝縮されたような、ちょっとした場所には2台のMacが設置され、訪れた人たちも自由にMerryワードを打ち込むことができるようになっている。

日英同盟から100年経た2001年5月に、日本とロンドンを繋ぐイベントが開催された。4月29日から5月13日までラフォーレ原宿で開催された「Merry-London Life」と、5月1日から31日までロンドン・セルフリッジで開催された「Tokyo Life」。その二つの場を繋いだのは「Merry（しあわせ）」という言葉。その言葉から広がった新しいコミュニケーションの形をレポートする。

「繋がっている」ということを実感できる空間

2001年3月に装いを新たにしたラフォーレ原宿は、以前にまして若い女の子たちで溢れている。1年前、アートディレクターの水谷孝次氏は、ここに集う女の子たちの笑顔を撮影し、その写真を大型ポスターとして出力、それを展示することで"Merry"な空間をつくりあげた。それは写真とデジタル機器による表現を使った、新しい形のアートやコミュニケーションの提案でもあった。そのMerryが、今年はさらに発展。「Merry-London Life」として、日本とロンドンを結んだ形で、新たな空間をつくりあげた。

真っ暗な会場全体に敷きつめられた人工芝、点々と置かれたベンチ、クライン・ダイサム・アーキテクツがデザインした会場はラブリーで、ファンタジーな夜の公園である。その一角にある大型スクリーンにはロンドンの女の子たちの笑顔や"Merry"なアートが映し出されている。そして何よりも印象的なのが、会場内の壁をものすごいスピードで流れ続けるMerryワード。これはロンドンのセルフリッジに設置されたiMacと、会場内のベンチに設置されたJ-PHONEの携帯電話（J-SH05）から入力された言葉がムービーとして再生されたものである。今回の「Merry-London Life」では写真はもちろんだが、この言葉が重要なビジュアルになっている。

「最初はスクリーンを貼って、そこに文字を映すことも考えたのですが、僕は不思議な公園という環境の中で文字が動き、写真が映し出されることをイメージしました。これまで写真展と言えばギャラリーや美術館など室内でやるものという暗黙の了解があったけれど、それももう窮屈かなと。Merryというコンセプトで考えてみれば、インスタレーションのような形でもいいかもしれない。さらに言えば、もっと気持ちのいい、リラックスできる場所で見た方がいいかもしれないし、写真だからといって額装しなくてもいい。もっと自由に、もっと身近な、パブリックな場所でコミュニケーションしてもいいのではないかと考えたんです」（水谷孝次氏）

「Merry-London Life」ではスピード感、ライブ感のある編集作業が空間づくりに大きな役割を果たした。大型プロジェクターから映し出されているのは、水谷氏がロンドンで撮影してきた女の子たちと、「TOKYO LIFE」開催中にロンドンのスタッフが毎日デジタルカメラで撮影して送ってくる人や風景の写真、そしてこのプロジェクトの開始にあたって募集されたMerryアート。水谷氏の写真をベースとし、その上にロンドンから送られてきたビジュアルが即時に編集されて映し出されていった。Merryワードも同様に、新たな書き込みを随時更新しながら流れていく。ELS回線を提供している東京めたりっくのウエブサーバーにたまったワードを随時拾いあげ、ムービーとして再生するシステムを、Merryプロジェクトのスタッフが開発したという。その際に、Merryワードとしてふさわしくないワードを削除できるようにしている。しかし、会場ではNGワードを入れるような人はほとんどいなかった。

また、来訪者のアンケートを見ると、携帯電話からMerryワードを入れることによって、ロンドンと繋がった、コミュニケーションできた、という感激を綴ったものが多く見られた。「こういうシステムにすると、誰とでも簡単にコミュニケーションがとれることを実感してもらえた」と水谷氏が言うように、多くの人がMerryで「結ばれている」ということを体験することができたようだ。

「Merryはアナログなアイデアとテクノロジーが分母と分子のような関係になっているものだと思っています。昨年で言えば、Merryというコンセプトに大型プリンターというテクノロジーが乗り、今年は大型プロジェクターや携帯電話といったテクノロジーが乗ったということです。Merryというベーシックな部分はこれからも変わることがないから、そこに日々変わっていくテクノロジーを合わせた形で展覧会を開いていきたい。だから、もし次にMerry展をやるとしたら、その表現方法はがらっと変わるかもしれません。Merryというアナログな分母とテクノロジーの分子＝コミュニケーション、あるいはアートになるという構造さえ変わらなければ、どんな表現でもいいかなと考えています」